

▼ライター・ランボーン・ウィルソン著、菟田真介訳『海賊ユートピア』(以文社) 4・20刊 四六判三一〇頁・本体二六〇〇円、以文社

「反社会的」であることの肯定

資本や国家のデモクラシーは静かに掘り崩されていく

白石嘉治



蝕の場所と時間は正確に計算できるが、肝心の天候はわからない。一七〇年代、ミッシェル・セーラーはこう言明し、メジャーな「天体の物理学」の転覆をわだかめた。彼が手にしたのは、二〇〇〇年以上前に書かれたルクレチウスの『物の本性』についてである。そして流体をモデルにしつつ、原子の最小の偏移(クリナメント)にもとづく乱流にみちた世界が語られる。この「天体の物理学」にたいする「気象の物理学」の顛場は、

のちにドゥルース・カタリノの政治哲学のなかで「条理空間」と「平滑空間」の峻別へと変奏されていくのだが、今日のわれわれには「平滑空間」の語ることの含意はあきらかに異なる。原発の爆発たいし、政府の描いた同心円状の「条理空間」は無効で無益だった。放射線物質は気象の流れてそって「平滑空間」を移動する。フクシマの出来事が告げているのは、「気象の物理学」の偏移は決して生きることのほじまりである。

本書が語る海賊たちも、一七世紀というまさに「天体の物理学」の胎動の時代において、それにあらがう「平滑空間」の気象を生きようとしたといえるだろう。著者のウィルソンは、ハキム・ベイというペルネームで著した『T. A. Z. — 一時的自律ゾーン』(『輪船拾訳、インパクト出版会』)で知られているが、そこで問われていたのは群衆の遊動のミクロな乱流である。二時的自律ゾーンは、条理化された都市空間に突如として出現する。それは不穏な海賊船のようなものであり、資本や国家による「条理空間」の捕獲から逃脱した生のあるがままの者。著者は本書の日本語版序文で、今日の「海賊行為」についてつぎのように言う。「こうした海賊行為は、ある意味では現代の企業『国家』を統制しえないような、気象の猛威の如きものだ。資本主義は崩れ

出している。ネズミたちも、船を見捨てはじめているだろう。奇々怪々な島々が、突然、水平線の彼方に出没している。それが荒ぶる航海だ」。海賊たちを語ることは、科学革命/絶対王権から始まった近代の条理化についての別様のシナリオをたどりよせることである。それゆえ著者が焦点をあてるのは、通常の海賊史では周縁的なモロッコのサレー・ラバトの海賊たちである。彼らはふたつの意味で「マイナー」である。まず第一に、スペインやイギリスの覇権を支えた私掠者(プライベートヤー)ではない。私掠者たちは、自由な外見のもとに海賊行為に従事していた。諸国家が戦闘をいわばアウトソーシングしていたのであり、ある意味では今日のNGOとかかわるところはない。それだけにサレー・ラバトの海賊は、みずから「共和国

をつつた。しかも、それが「ユートピア」とよびえる質をそなえていたのは、海賊たちが生きた「気象の物理学」が「共和国」を組織し、「海賊原理」にも「共和国」が出現していたからである。著者は平等主義的な流動性にはるエロスの輝きがある。支配をしりぞけることは、気象のなかでレスネイドの偏移に身をゆだねることである。われわれは「海賊ユートピア」の歴史から、どのような教訓をひき出すことができるのだろうか? 著者が繰り返しているのは、すでにふれたように、そこに近代のデモクラシーの起源がひそんでいる可能性である。だが、起源への別行は、現在の状態は別のものへと生成する意志がはらまれていく。だから著者の「海賊ユートピア」について、一方には社会があり、一方にはレジスタンスがある」という言明をみずして

はならない。デモクラシーの起源には、社会そのものにたいする「レジスタンス」がみいだせる。今日、デモクラシーが支配の装置になりはてしているとするれば、われわれも海賊たちとともにその底へとおりにいくべきだろう。訳者による解題がみごとく喝破しているように、賭け金はく端的に「反社会的」であることの肯定である。

一方には「天体の物理学」が支配する「条理空間」があり、一方には「気象の物理学」によりそう「平滑空間」がひろがっている。あるいは、一方に資本と国家の捕縛があり、もう一方には無限の偏移をほらんだ海がある。後者は海賊的な思考を紡いだクリッサンが「全」世界とをつなげたものどろがわらないだろうし、前者の包摂にたいする闘いは、ファンクのいう「第三世界プロジェクト」でもあるだろう。海賊たちが生きた気

象の猛威にみいだされたのは、「海賊ユートピア」という存在の領野における無数のシナリオである。われわれにできることは、それらに迷いこんで「荒ぶる航海」をつづけることである。本書の繙訳した「海賊語り」の乱流は、われわれを社会そのものに抗する運命的な情熱へと引きこらう。無数の渦が形成されては崩壊し、資本や国家のデモクラシーは静かに掘り崩されていく。本書が告げているのは、フクシマ以後、われわれがレジスタンスとともに生きるべきことである。本書の繙訳した「海賊語り」の乱流は、われわれを社会そのものに抗する運命的な情熱へと引きこらう。(フランス文学)

「図書新聞」

2013. 8/31 (土)